

伝統文化狂言の伝承の視点から見た 「今の時代にふさわしい学びの環境」

山田 師久^{*1}

＜概要＞伝統文化狂言の伝承と言うのは親から子、子から孫へと受け継がれる伝承の形態が基本である。これが家元制度となり、その利点は子供のころから文化を伝承させられることである。欠点は形骸化してしまうと文化の劣化につながることである。大和座は家元とは無関係の伝承である点、そこに学びを必要としてきた。その点において大和座の学びの環境は今の時代に一石を投じるものとなるだろう。

伝統文化狂言の伝承

古典伝統芸能の伝承方法は、現代人から見るとかなり効率の悪い方法である。特に能・狂言は500年近くもの長きにわたり伝承されてきた。それには親から子へ伝える家元制度がかなり有効に働いてきたといえよう。『風姿花伝』には「大かた七歳を以て初めとす」とある。あまり厳しくせず自由にさせよ、とはいうものの基本はしっかり教えるという指導方法である。古典伝統芸能の継承では教育の動機が家系の存続に直接つながるものであり、まさに生きるために必要な教育であった。また幼少の時期に型を教え込む場合は理屈など不要である。どういう場面での台詞か、またなぜそのような型をするのかという疑問など不要である。疑問を抱かずに台詞や型を丸ごと体に入れる。そういう方法で古典伝統芸能の世界では代々家で伝承がなされてきた。

大和座の安東伸元師匠は狂言の家筋ではない。しかし、狂言の台詞の指導方法は古くからある「鸚鵡返し」だ。これは寺子屋の音読法と同じ、台詞の一節を師匠が発声し、弟子がそれを繰り返すのである。弟子は師匠の台詞を声の音程・抑揚もそのまま真似て発声する。台詞を暗唱したのち立稽古となる。立稽古では台詞を発しながら所作をする。それを師匠が修正しながら型を指導する。立稽古に入ってから、台詞や型についての合理的な説明が行われる。それは主に「演劇的に考えるとこのように演じるべきだ。」という説明だ。たとえば狂言「仏師」の一場面で「あまり大きゅう造ってこのようにして拝むも腰が痛かろう。」という場面では「前に大きい

仏像があると想像して体をそらせなさい。」との説明がなされる。また「あまり小そう造ってこのようにして拝むも、窮屈にあらう」という場面では「目の前に小さい仏像を想像して、それを見て拝みなさい。そうすると観客にもこの男が仏像を拝んでいるように見えます」との説明がなされる。演者としても観客としても合理的で納得できる演出である。これは安東師匠独特の指導方法である。

また「稽古には素人稽古と玄人稽古がある。玄人をめざすなら録音や録画に頼ってはいけません。」との戒めの言葉がある。「仕草や型は目に焼き付け、台詞の言い回しや抑揚は聴いて覚えなさい。」という師匠の教えは古典芸能の世界ではあたりまえのことである。落語・浄瑠璃・歌舞伎・能・狂言など、口承文芸を祖とする芸能は師匠からの口伝えなどの直接の指導が主である。特に玄人をめざす弟子は師匠に付き添い、朝から晩までの稽古をじっと側で見続けることが基本であった。師匠の本番はもっとも勉強になる機会だ。装束の着付けから後片付けまで、師匠に付き添いすべての行動を観察し、すべてを学びとるのだ。

狂言小謡の稽古も基本はマンツーマンである。師匠の謡を聞きそれをまねる。歌詞があるが、その歌詞の横にゴマ譜が付いている。これは一音一音の上げ下げ、また母音をのぼすなどの印であって、ドレミファのような基本となる音階を表しているのではない。音の高さは師匠の声の高さに合わせて謡う。稽古人が大勢あつまり、皆で1時間近く謡い続けると清々しい気分になる。師匠は弟子全員と向き合い、拍子をとるな

*1 YAMADA, Morohisa : 大和座狂言事務所 e-mail= yamada@kochu.kansai-u.ac.jp

がらリードする。

ところで、私が師匠に狂言を習うようになった頃の稽古は天神橋六丁目から東へ3分、国分寺町の交差点に面した西南の角地にあった明治時代に建てられたお屋敷の稽古場で行われていた。玄関を入ってすぐに三間四方の能・狂言用の稽古舞台が学びの場であった。都会の中で、このお屋敷だけが時間を越えた異空間であることも、古典伝統芸能を支える貴重な要素であった。

月3回の稽古は昼から行われるが、私のようにフルタイムで働く者は夕刻から三々五々集まる。その頃はオーボエ奏者・チェロ奏者・人形劇団員・朗読劇団員・若手能楽師・能面作家・大学や高校の教員などさまざまな職種の人たちが集った。狂言の稽古が一段落すると、夜も更けるにつれて話題が文学・芸術・哲学・政治・経済・社会学…と多岐にわたり深夜に及ぶことが常であった。これは大和座が狂言という古典伝統芸能を基軸としながら、新しい学びの場を創出していた姿であった。

そこから稽古場を千里山という新しい場所に移った現在も、相変わらず様々な職種の人々が加わり、談論風発が続いている。

今の時代にふさわしい学びの環境

現代は情報伝達の手が速くなり、その範囲が広くなり、その量も大量になった。情報技術の発展も「日進月歩」をもじって「分進秒歩」などと揶揄していたこともつかの間で「刹那弾指の進歩」とまでいえるような状況になった。おかげで私たちはタブレットやスマートフォンで世界中の情報を簡単に手に入れることができるようになった。虚実・正否はともかくとして、その情報量はどんどん膨れあがり、膨大な量となっている。ネットの環境が整う状況であれば、誰もが物知りになれる時代になった。

いまや知識の習得だけならば、わざわざ学校へ行かなくともネットを駆使すれば一人で学ぶことが可能だ。実際に中等教育を受けずに、自宅で学習をして高等学校卒業認定試験を受け、大学受験をするという人も増えてきた。さまざまなサイトで初等・中等・高等教育で学ぶあらゆる教科の質問がなされ、それに対して様々な解答が提示されている。また百科事典・国語辞典・古語辞典・歴史事典・英和辞典など、あらゆる言葉や事物をネットで検索し調べることが容易

になった。さらに古典文学作品や古文書・絵や書などのような古典籍なども簡単に検索、閲覧できるようになった。このような情報が無尽蔵に増えつづけ、私たちの手元にあるのだ。またネット上ではさまざまなウェブ授業が公開されている。私たちは家に居ながらにして、また電車の中で吊革につかまりながら世界中のウェブ授業で学ぶことができるのだ。学校教育での学びがそのような授業だけで良いならば、わざわざ学校にまで足を運んで授業を受ける必要もなくなってくるだろう。

一方、人々の学校離れが進む今日、学校もさまざまな授業の改革や工夫をしている。学校で集まって授業を受ける意義は多くの生身の人々と向き合い、コミュニケーションをとりながら、良し悪しを判断したり、それぞれ意見を言い合って考えを導き出したりすることである。なによりも一緒に生活することで人間関係を築き、またトラブルが起きるとそれを修復することで社会性を身につけることができる。だから学校教育は知識の習得よりも考える力や、表現する力を養うことを目標とするところが増えた。またツイッターやフェイスブックを使って学生の意見を聴取している大学の授業もある。口頭で意見を言わせるよりも多くの学生の意見が聞けるという利点があるそうだ。授業を効率よく、便利で簡単に行う技術はこれからもますます発展してゆくだろう。しかし、児童や生徒・学生の感覚を刺激して楽しませることが本当の学びにつながるのだろうか。

児童や生徒に限らず多くの人々がスマートフォンやタブレットを持ち、いつでもどこでも大量の情報を持ち歩き、自分の求める情報を手に入れる環境にある。しかし、その情報を使って得た知識をもとに熟考して、学びに結びつけている人々がどれだけいるのだろうか。知識が簡単に手に入ることの弊害はじつくりと熟考することができないことだ。

本来の学びは時間や手間暇がかかり、その効果はすぐに表れるような安直なものではない。大和座での学びを今の学びの参考にするのであれば、じつくりと考える時間や、議論する時間がある環境こそ今の時代にふさわしい学びの環境といえるのではないだろうか。国分寺で聞いた師匠の言葉は二十年経った今も実感できていない。曰く「舞台の上では存在感がすべてです。」と。